

こだいら ちよつとむかし



小平の風とお茶



あけましておめでとうございます。

今年も、タマおばあさんに語ってもらうかたちで、こだいらのちよつと昔の暮らしの様子をまとめました。

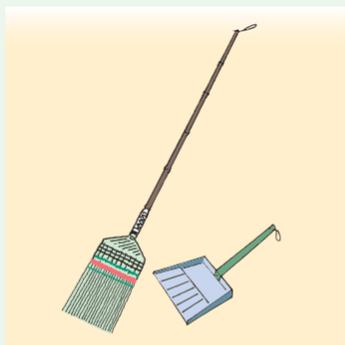
— 風 —

私が小さいころは、この辺りは畑ばかりで、遮るものがないから、風の強い日は大変だったの。そのころはどこからか富士山がよく見えてね。

「富士山に雲がかかると風が強くなる」といって伝えもあつたんだよ。

秋が深まってくると、冷たい北西の風が強く吹きはじめると、それを「おかまつ風」と呼んでいたんだよ。その風には、「おかまつ様」という神様が乗っているんだって。

昔は台所にかまどがあって、薪で火を焚いていたの。それで、かまどにおかまつ様という神様をまつっていたんだよ。



めに出雲に行くと、月末に木枯らしに乗って帰ってくるといわれていてね。その風をこの辺りではおかまつ風と呼んだの。おかまつ風が吹くと、冬支度を始めたものだね。

冬の間は、「関東のからつ風」といって言葉があるくらい、北風がピューピュー吹いて、本当に寒かったの。

そのころはよく霜柱ができて、朝、学校へ行くときなんか、踏むとザクザク音がして楽しかったよ。日中、気温が上がると、霜柱

がとけて、土がどろどろになるの。それを繰り返していると、だんだん土がかさかさになっていくんだよ。

— お茶の木 —

一日に何度も何度も掃除をしなければいけないから、本当に大変だったよ。

昔は家の周りには風を防ぐために、たくさん木が植えてあったの。

今、青梅街道や五日市街道などにけやきの大木がところどころに残っているけれど、防風林として植えたものなんだよ。

畑もね、風が強いと、土が吹きあげられ、作物の上にかぶさるから、育ちが悪くなるんだよ。

土が飛ばないよう、畝と畝の間に竹や藁を置き、畑の間隔を空けて横一列にお茶の木が植えてあったの。



— お茶 —

お茶の葉は、4月から5月に摘むの。お茶の木がたくさんある家では、茶摘みに近所の人を頼んだり、子どもたちも手伝って、それは大忙しだったよ。ずっと昔は、「茶摘み休み」といってね、学校が一週間ぐらい休みになったそうだよ。

摘んだ葉はお茶屋さんで夕方になると集めて来て、一貫(約3・75キログラム)いくらで買ってくれるの。農家にとっても貴重な現金収入になったし、子どもたちも小遣い

もらえるから、一生懸命、手伝いをしたんだよ。

自分のところで製茶する家もあつたね。私のおじさんはお茶を作るのが上手だったから、おじさんには製茶専用のかまどがあつたの。だからうちではいつも頼んで作ってもらっていたの。

お茶作りは力があるから、男の人の仕事だった。炭火をおこして、和紙を貼った畳半畳ほどもある焙炉の上で、作り手が上半身裸になって、お茶の葉を手で揉みながら作るんだよ。

熱くなった茶葉を素手で揉むんだから、大変な仕事だった。焙炉も使っているうちに和紙が火で焼け焦げてしまうから、糊で何度も貼り直したんだよ。それに新しい和紙はもったいないから、使い古しの和紙なんかを使ったの。だから人に頼んで作ってもらったときも、摘んだお茶と一緒に和紙を持っていったんだよ。

農家ではお茶をよく飲んだね。10時と3時には、お茶休みをしたよ。昔はお茶休みのことを「こびる」とか「おこじゅ」っていったそうだよ。農作業は重労働だったから、何かちょっと食べないと、体がもたないんだよ。



タマおばあさんのお話は、いかがでしたか。感想をどうぞお寄せください。

もなど自分のところで採れたものを食べたんだよ。夏にはトマトやきゅうり、すいか。秋には柿や栗なんかもあつたね。たまにはよそで饅頭や団子を買ったこともあつたけど、うちで作った焼き餅やご飯団子なんかも食べたよ。

